

時の過ぎゆくままに (5)

エンヤコラ今夜も舟を出す

(告白的恋愛論に代えて)



桐野 三郎

※ 天の声 (序)

二人が睦まじくいるためには

愚かであるほうがいい

立派すぎないほうがいい

立派すぎることは

長持ちしないことだと気付いているほう

がいい

完璧をめざさないほうがいい

完璧なんて不自然なことだと

うそぶいているほうがいい

これはご存知の方も多いはずの、吉野弘の「祝婚歌」といっても、三十四行も続く長い詩の冒頭の八行だが、この八行を口ずさんだだけでも、肩の荷がすつと抜け落ちて行くような安らぎが感じられて、僕も好きな詩である。

もちろんこの詩は題名どおり、作者の故郷山形県は酒田市で、姪御さんが結婚式を挙げることになったとき、自分は所用で出席できなくなってお祝いにプレゼントした詩だ。

という意味で、もちろん「祝婚歌」には違いないのだが、ここで言う「二人」を、時と場合によって色々な関係の二人に置き換えてみても、全編がそのまま通用するのではない。そう解釈してもいいような広がりのある空気がまた魅力である。この詩を「天の声のような」と評した詩人がいる。僕にも異存はない。

ところで、実はこの詩を、この秋結婚する若いカップルに贈りたいから墨書して欲しいと、僕のところに持ちこんできたご婦人がいるのだ。そう、クセの強い悪筆は知る人ぞ知るこの僕に、である。

常識的にはお断わりするのが当然ながら、むげにそうもできない、日頃からお世話になりっぱなしの相手、しかも詩の中味がのっけから「立派すぎないほうがいい」と言っているのだ。下手を承知で頼まれているような気がしてお引き受けた次第だった。

が、さて、そこで持ち込まれた「祝婚歌」のコピーを見ながらいまこれを書いているのだが、なんとこの祝婚歌の一行一行が、だんだん僕自身に語りかけているように思えてきて仕方がない。「墨書してくれ」という依頼こそ、まさに天の声だったのではないか、そう思えてくるほどに――だ。

※ 〈新刊同様 使用回数少なし〉

ことのついでに、と言っては失礼かもしれないが、僕に墨書を依頼された桑木野さんご夫妻について、やはりちよつと触れておきたい。これほど絶妙な調和を保っていらつしやるご夫妻、いやご家庭もだが僕は他に知らない、それほどユニークなご家族だからだ。

一口に言ってご主人は、高校時代からのサッカー少年そのままを、喜寿に近い今日まで通して来られたような人、と言つていいだろう。天衣無縫、あるいは春風駘蕩といった性格が誰からも愛されて、ご当人の不愉快な顔など僕はまだ一度も見ることがない。

ご本業は大きな規模ではないが、長年続けている建設関係の会社経営者。といつても、実務は奥さんや部下に任されることが多いから、サッカー界の（協会役員なども長く努め

られた) 桑木野さんで通っている。

という桑木野さんのいま一つの特性は、大の生き物好きという点だろう。犬や猫の可愛がりようもだが、生きとし生ける物すべての命に對してだ。自宅の庭の鉢植えに毛虫がついていることに気づいたご本人が、鉢ごと車で山まで運び、毛虫にふさわしい木を見つけて毛虫を放たれる話を聞いたときは僕も驚いた。「美しい蝶になって帰って来いよ」という願を込めて——である。

そして又、そのDNAをそのまま引き継がれたのがご長男。大学で獣医学を修めて開業された犬猫病院でも、犬猫はもちろん、命の尊さは虫けらに至るまで全て平等という、損得そっちのけの経営理念には僕も脱帽している。

中学校時代から美貌で有名だったという奥方が、ひとめぐり年長の桑木野さんに嫁がれ

たのも、想像するところあの暖かいお人柄に魅せられてのことだったと思う。が、それにしても子育てを含めた(娘さん一人は嫁がれて主婦)主婦業ばかりか、会社経営の中核まで担ってこられたのだから賢夫人、いや、そればかりか華道師範としての活躍などまで考えると、多才でもあられたわけだ。そんなお二人の関係を遠慮のいらぬ友人として言わせて貰えば、いわゆる恰好の「割れ鍋にとじ蓋」的に見えなくもない。

だがもちろん、こんな似合いのご夫妻でも、長い結婚生活の間には波風も起こる。

さすがの奥方も、家庭や会社の仕事そっちのけでサッカー関係の会合などに明け暮れるご主人に、不満を爆発させられたことがあったらしい。

「もう私も我慢できない！ この家を出て行くわよ！」

しかし桑木野さんは、奥さんのこの剣幕に少しも慌てふためかず、

「そうか、出て行ったられば仕様が無^ねで、俺^{おい}が証明書を書つやつが」と、柳に風の如く受け流されたという。

だが、証明書とは何ぞや？ といぶかる奥さんに、次の再婚相手に対するいわば「品質証明書」だというから、これには奥さんも空いた口が塞がらなかつた。

なんと「新品同様、使用回数少なし」と書いてあげるとのたまうたという話、今なお桑木野家に残る伝説だ。

これではまるで中古車の宣伝文句、ケンカになどなるわけがない。奥さんも吹き出さずにはいられなかつたという。

桑木野さんとは、どこか仙人のように思えるときもあるぐらいの「生きかた名人」だと、僕はかねがね畏敬の念を抱いているのだが、

これはやはり持つて生まれた天性のご性格だろう。

そして「祝婚歌」に出逢った夫人が、「まるでうちの主人のような・・・」と実感されて、結婚の引き出物として最適と考えられるようになった——そんな流れだったのでないだろうか。いや、僕の勝手な想像だが。

※ くたばる前に「告白的恋愛論を」

さて、前口上が長くなつたが、今年には戦後七十年。あの夏、本土決戦を目前にして一億総玉碎を信じ、爆弾を抱えて敵戦車の下に飛び込む覚悟が殆んど出来ていた、中2だった僕が八十三歳である。戦争が終わった歓喜の中で、ひよつとすると僕たちは二十世紀いっぱいぐらいは生きられるのでは？ という嬉しさがこみ上げてきたことを憶えている。それがなんと二十一世紀に入つてすでに十五年

だ。

というこの七十年をひと口で総括すれば、連載を続けている他誌にも書かせていただきたいが、僕にとってはまさに「丸儲けの七十年」だった。

もちろんぼくのことだ。失敗や挫折、ほかのチョンボを数え上げればキリがないが、そんな全てをいつも十三歳の夏の、あの恐怖と比べて考えてきたから、「生きちよるだけ」ですでに丸儲けに思えたというわけだ。誇張でなしに、六十八歳のクモ膜下出血だとか、八十歳での大腸ガン手術なども悲壮感や恐怖などとはおよそ無縁であった。

だが、さすがにこの春肺炎を煩って入院した時の心境はこれまでと違った。

「ははあ、なるほど、人間はこんなことを繰り返しながら徐々にあちら岸に近づいて行くのかも・・・」という想いが頭をかすめ、

終活なんてはやりの言葉を思い浮かべたりもした。しかしそれも入院二週間目ぐらいいまで。病状が回復して退院する一ヶ月後には完全に元の自分に還っていた。終活なんぞ語るには「俺はまだ若過ぎる」、いやいや、体力を自慢しているわけではない。人間としてあまりに未熟、勉強不足を恥じての話、まだ終活どころではないと、正直に言いたいわけだ。

だが、一ヶ月にわたる入院を終えた僕に対して、「そろそろお前も、告白的恋愛論を書いておけよ」とけしかける旧友たちがいる。あれはどうやら「桐野がくたばるのも、もうそんなに遠くはないはず」と予感してのことだろう。

でも、もちろんその前に、本誌6号に僕が「告白的『告白的恋愛論』評」を書いたことを受けて、その続きをくたばる前に書いておけ、という催促の意味があるのは分っている。

「告白的恋愛論」の著者は官能小説の世界では世に知られた渡辺淳一。彼の初恋の相手は早逝した美貌の天才少女画家、加清純子だが、彼女が阿寒の雪中で自殺したところ、北海道出身で東京在住の画家の家に下宿していた僕は、画家たちと毎晩のように加清純子のことを語り合っていたのだ。渡辺淳一がまだ学生、作家の卵にすらなっていない六十年以上も昔の話である。

そういう因縁があつて、自分の当時の、失恋話など絡めて書かせて頂いたのが「告白的『告白的恋愛論』評」だった。思い出して「炉ばたセイ談」6号をひもといてみると、なるほど巻末の編集後記にも、亡き入院貞子さんが書いた「惜しむらくは桐野会長の数多いであろう成功のお話のないことでした。これもまたのお楽しみ・・・」なんて文言が目に入る。

貞子さんの言われる「成功の話」とは、当然、僕が書いた空振りの例ではなく、ヒットした、つまり実った恋のことだろう。それを「数多いであろう」と書いてくださったのは光栄の至り。だがこれは単に、僕は酒の席などで「そもそもスケベでない男なんて、男じゃないよ！」などとカッコつけたがる悪癖があるから、そう見えるのかもしれないが、素直な自己評価をいえば、極々平均的日本男性並みで誇るべきものは何もない。

がさて、「平均的日本男性並み」と書いてからふと思うのだが、ところで平均的日本男性の生涯ヒット数、つまり実った恋の数なんてどれ位のものなんだろう。

いちど誰かに尋ねてみたい気がしないでもないが、もちろん知ったところで、いまさら打率アップを狙うほど僕も無謀ではない。

※ 一穴主義者は異教徒？

酒席で初対面の相手と交わす話題で、避けたいほうが良い例から順に言えばまず宗教の話、次いで人種、国籍、学歴などと教わるものだった。が、こちらは時代や場所によって変化があっても、最も無難で歓迎される話題は「エッチな話」。これは古今東西変わらない知恵だといふけど、これもまた、自分の品位を落とすてしまつては元も子もない。「品良く人前でエッチな会話ができて男は一人前」などと教わるものだった。しかしその辺の加減が結構むずかしい。で、これは僕が聞いた模範回答の一例。

鹿児島市で就職した僕は、役員になつてから四十歳台に、月イチで福岡市で開かれる一泊の経営者セミナーに出席していた。目ざましい成長を遂げている企業のトップを講師に招いて半日勉強し、夜は酒席で交流を深めよ

うという会だ。

その日の講師は北九州市を中心に、クリーニング業界で旋風を巻き起こして急成長をしていた会社の社長。日焼けした顔が若々しい男前だった。

講演が終わつた夜の宴席で、質疑の冒頭に立ち上つたのは熊本ダイハツの社長で、こちらはいかにも社長といわんばかりのでっぷり型。

「今日の講師はすごいハンサムでいらつしやる。女性にモテるであろうことは必定。固い勉強の後の肩ほぐしに、今夜は女性に對するその辺のテクニクをとくところご伝授願いたい」と、でっぷり型にしては座を和ませる軽妙な切り出しだった。

が、これに応えたかの社長の姿はいまも僕の記憶に残っている。質問に応じて立ち上つた彼は、五、六十人ぐらいの出席者をげげん

な顔でぐるりと見回しながらおもむろに口を開いた。

「あのう、念のために伺いますが、今日の出席者の中にまさか一穴主義の方はいらつしやいませんでしょうね？」

もちろん出席者は男だけだ。皆キョトンとして笑っているだけである。一呼吸おいて講師はにっこり笑いながら言った。

「いや、これで安心しました。一穴主義の方は私にとって異教徒みたいな存在ですが、今日ご出席の皆さんは私と同類のようです。だったら女性に対するアプローチのやり方も皆さんと似たり寄ったりで、格別ご披露するよなものは何もありませんよ」

質問も軽妙でけっして悪くはなかったが、この見事な切り返しはそれを上回る洒脱の好例だろう。



※ 世間知らずの東大生

「随筆かごしま」は四年前、一九〇号で休刊に至るまで三十四年間にわたって刊行され、「南日本出版文化賞」も受賞されるなど、郷土に愛された文化誌だった。主宰者は上蘭義之氏だったが、早逝されたため奥さんの上蘭登志子さん（本セイ談会員）になってからのほうがはるかに長かった。

その「随かご」の創刊三十周年記念だっただろうか、祝賀の挨拶の冒頭に立ったのが鹿児島ペンシルクラブ代表の相星雅子さん（同じく本セイ談会員）。

「昨夜（随かご）の創刊号を読み返していましたが・・・」という切り出しに続いて突然、「僕が童貞を失ったのはその寮にはいつて三日目の夜だった。という桐野三郎さんのエッセイなどが出てまいりまして・・・」と続くではないか、これには僕も慌てた。

たしかに、言われてみれば自分でもぼんやり覚えてはいるが、四十歳台で書いたエッセイを傘寿に近い自分が聞かされているのだ。しかもけっこう錚々たる来賓の顔も見える席で、なんと童貞喪失の話を一である。しかも相星さんはそのスピーチの中で触れてくれなかったが、僕が書いた文章の中で、童貞云々はほんの入口の話、書きたかった本筋は、その夜同行した寮仲間に、最初接した娼婦に本気で惚れ込んだ男がいて仲間みんなが心配した、というか、手を焼いたといういわば友情物語だったはず。

だが、その相星さんへの怨みは今回はさておいて、まずは寮生たちの後日談にすこし触れておきたい。

まず簡単に当初の状況から説明すれば、遊廓体験は入寮三日目の夜「童貞は集まれ」という先輩の号令で、五、六人いっしょに新宿

二丁目に繰り出し、値段交渉まで先輩にして貰っていわゆる初体験をした。が、その中の一人、東大に入学したばかりの一年生が初体験の娼婦に夢中になったらしく、自分もバイトで稼がなければならぬ身分のくせに、二丁目に通いつめはじめたということで寮生間で大問題になった。なんとその娼婦を苦界から救い出さなければ、とまで言い出したのだ。もちろん周りの学生は必死に、それが現実的に如何に無謀なことかを入れ代り立ち代り説得したが、徒労に終わった。遂に寮に居づらくなって彼が退寮するとき、中学時代から同級だった僕に言った言葉は今でもはつきり覚えてる。

「桐野、俺たち男としてこの世に生まれてきて、只ひとりの女性も救えもしないで一体何ができるといふんだらうね？」

去り行く彼への寮生仲間の評価は、おおむ

ね「頭の良かはずの東大生にもこげん世間知らずのバカがいたとは！」というような驚きの声だ。半分は僕も同感ながら、いまひとつ「世の中にはこんな珍種の男がまだ存在するんだ！」という新鮮で爽やかな感懐があった。以来、ぷつりと音信の途絶えた彼と、僕が再会を果たしたのは、十二年後、東京オリンピック前年の東京でだった。

※ 貿易商になつた世間知らず

地元（鹿児島市）百貨店の東京事務所長として、僕が西麻布で暮らすようになったころ、なんと、かの世間知らずの東大野郎は日本経済高成長の波に乗って、赤坂の目抜きに居を構える貿易会社の社長にのし上がっていた。

規模はまだ大きくはなかったが、赤坂でも有名なビルのワンフロアで、四、五十人の社員を手足のように動かしている彼の姿は、し

よぼくれた学生時代からは想像もできない躍動感に溢れていた。電話でしゃべる英語など横から聞いていて

「お前の英語、あんなに旨かったかね？」と聞くと、「いや、旨くはないが俺の英語、ケンカとなれば不思議に、次から次に自然と跳び出してくるだよ」などと笑っていたが、彼がのし上っていったエネルギーの根源はやはり、一人の女性も救い得なかった学生時代の無念さがバネになっていたのだろう。もちろんぼくも、学生時代のあの《二丁目事件》には一切触れなかったし、彼自身も語ろうとはしなかったが。

東京での三年間のサラリーマン生活は、彼との再会があつて僕にとつても思いも寄らず、人生の裏表まで覗けた濃密な経験となった。僕といま一人、これも六本木に近い麻布十番に住むシナリオライターの男。彼も中学校時

代から同級の誼^{よし}で貿易屋とつるんでほとんど週に一回以上は銀座、赤坂、六本木はもちろん、彼のベンツに同乗しては横浜あたりまで繰り出すこともざら。そればかりか時にはバーやクラブのママなどまで加わって、箱根や伊豆、千葉県下までゴルフに出かけることもあった。もちろん経費は当時流行の貿易会社接待だ。

貿易会社には当然外国人バイヤーの訪問が多い。中でも上得意ともいえるバイヤーたちへの接待は徹底していた。プライベートの友人まで一緒、という夜の席はより親密度が高まるという理由で、「今夜もすまんが又つき合ってくれないか」という電話があると、半分はこちらも嬉しいくせに「いいよ、何とか時間の都合をつけるから・・・」などと勿体つけては夜の街に繰り出して行くものだった。そして、大きな取り引きには性の提供まで、

というのが万国共通の常識だという彼は、キヤバレーにしてもバーやクラブにしても店のマネージャーと手際よく、閉店後バイヤーの宿泊するホテルに送り込むホステスの手配までやつてのけるのだ。僕らは彼のエネルギーに呆れながら、見て見ぬ振りをするぐらいが関の山だった。

彼はそのころすでに結婚し、二人の娘がいたのだが、六本木でバーを経営する愛人の存在を、僕らには隠そうともしなかった。しかし、そんな強がりこそが学生寮時代を知る僕らから見れば、世間知らずと嗤われた自分に對して今なお、リベンジを続けているように見えなくもなかった。

※ セックスハンターに成長した東大生

そしてこちらは、いま一人の後日談だが、「童貞集まれ」のあの夜、遊廓にでかけるカ

ネがなくて、涙を飲んで我慢していたという男の話。

度の強い眼鏡をかけていかにも秀才という感じの、彼も東大生。僕らのように議論も遊びも好きで徒党を組みたがる寮生とは、一歩距離を置いていたから親しくはなかったが、卒業して有名金属会社に就職したのは知っていた。鉱山関係という業種も珍しかったからだ。

という彼と再会したのは、なんと半世紀あと。僕らの学生寮の、開寮五十周年記念式典が東京で開かれた夜だ。お互いに現役を引退して古稀を過ぎてからだった。

式典が終わって宴席に移ってからすぐ僕の隣に割り込んできた彼が、再会の握手が終わるや否や回りを気にする遠慮などそつちのけで、

「桐野さん、あんた達が新宿二丁目に繰り

出していったあの夜さ」と、初体験の夜のことをいきなり持ち出してきたのには驚かされた。

「ゼニがなかった俺は、残念で悔しくて一晩中泣いていたんだぜ！」という前口上もちよつと意外だったが、というのはもちろん、期待に胸躍らせて出掛けて行つたあの夜の僕は、そんな寮生がいたことなど頭の片隅にもなかったからだ。

しかし、「だけどき、社会に出てからの実績では俺、あんたたちに負けていないと思うぜ！」と、つまり彼がその夜、僕らに自慢したかったのはセックス経験の豊富さ、というか、女体遍歴に関するウンチクだったらしく、僕らは延々と彼のご高説を聞かされる破目となった。

転勤先が十数ヶ国に及んだというから、訪れた国は数十ヶ国、人種も白、黒、黄色と、

国数に匹敵する人種の女性を経験したというのはまんざらホラでもないだろう。ついには「でも最高はやはり中近東の女たちだね。王様たちがハーレムに美女を集めては、次々に子孫を増やしていった歴史のせいだろうが、今でも忘れられないよあの女たち・・・」などと、長々とノロケまで聞かなければならない夜となった。

※ 男と女の間に横たわる深淵^{シエン}



「娼婦はより神に近い」という言葉を僕が知ったのは社会人になってからのことだが、聞いた途端にすっと腑に落ちた。というか納得した。そんな記憶がある。

ファッションやグルメの話題に明け暮れ、男の価値はリッチかどうかだけでしか判断できない。そんな女たちがバカに見えるから

——というような単純な話ではない。

戦争が終わった昭和二十年の秋、十四歳になったばかりの僕たちの前に忽然と姿を現わした夥しい数の彼女たちが、それまでぼくが見たこともない人種、今流で言えば異星人のように見えたことが根っこにある。「夜の女」後に「パンパン」と呼ばれる女性たちだ。

八月十五日、一億総玉砕を覚悟させられていた日本中が、突然、鬼畜と恐れられていた米英に無条件降伏をしたのである。占領軍がやってきたら日本人はどうなるのだ。無責任な流言蜚語に日本中がまだ怯えていたあの時期に、遠巻きに只うろたえているだけの男たちを尻目に、敢然と鬼畜のフトコロに身を挺していった女たちがいたのだ。

鹿児島市に一千名の米軍が進駐してきたのは、終戦後二ヶ月が過ぎた十月中旬、宿舎に選んだのが僕らの中学校。僕らが追い出さ

れて（伊敷の兵営跡に）出て行くまで二週間ほどかかったと思うが、わずかその間に校門周辺に出没しはじめた異形の女たち（まだモンペ姿が多い普通の女性より派手な服装に、スカートで顔を隠していた）が、すべて「娼婦」といわれる女たちだと知ったときの僕の驚きは、いま思い返してみてもやはり一種、異様な世界が目前に出現したようだった。

もちろん日本中が飢えていた時代だ。背に腹は変えられない。だから大事な呉服をたとえば米と交換する。もちろんこれはよく分かる。だが、あの激しい戦争が終わったばかりの敵兵に自分の身を売る。それに恐怖を感じないばかりか最も効果的なビジネスだと知っていた女たち。まさかあれだけの女たちが経験的にそれを学習してきたプロばかりだったはずはない。大部分は、せいぜい片言の英語を並べられる程度のアマチュアだったはずで

ある。

その女たちが、うろたえる男たちを尻目にヤンキーのふところに飛び込んでいった姿を見て、「女とは、男とは異なる嗅覚、あるいは本能といってもいいような何かを持っているのではないか？」そんな疑問が芽生えたような気がする。つまり男にはとても理解できない何か、それを感じた少年の日の疑惑に応える回答が「娼婦はより神に近い」という言葉だった、とでもいうような・・・。

戦後、焼野ヶ原と化した鹿児島市中をヤンキーたちと、腕を組んで闊歩するパンパンという名の娼婦たち。彼女たちを遠巻きに眺めていた十四歳の僕の胸中には、明らかに畏怖、あるいは畏敬といってもいいような感懐が含まれていた、そしてそれは今なお、僕の女性観の底に流れている。



※ 沖の村残影

たしかに「男と女の間には 深くて暗い川がある」なんて歌があるのを知ったりして、僕の女性観もすこしは成熟していったのだろうが、よりはつきりと輪郭が見えたように感じたのは、「性の違いは種の違いより大きい」という著名な生物学者の言葉に接したときだ。

「なるほど、やっぱりそうだったんだ」。つまり、世間知らずの僕は終戦の秋に出現したあの娼婦たちを見て、はじめてその「大きな違い」の存在に、漠然とながら気がついていたということだろう——と納得した。

それでも、男が初体験とやらを済ませれば当然、大人になったような気分になるのは本当だ。ついこの前、値段交渉までして貰って体験したばかりの大学一年生のくせ、新宿西口の飲み屋街で一杯三十円のウメ割りやブドウ割りを煽っては、

「酒は飲むべし百薬の長、女は買うべし無上の快樂！」などと仲間内で氣勢をあげ、学割の効く夜更けを待つては二丁目に繰り出して行く、そんな季節もたしかにほんのしばらくは続いた。が、やがて、そんな季節の空しさにも気づく。僕もそうだった。

鹿児島市内には古くから知られた遊廓街としては、沖の村があつた。新興の易居町界わいに点在する「青線」地帯に比べると、歴史の古い公認の「赤線」地帯だ。

たしか大学三年の夏だった。休暇で帰省していた僕は、先に就職して社会人になっていた親友に誘われて天文館で深夜まで飲んでたのだが、夜半過ぎると開いている店がない。語り足りない友人が言い出したのが、「おい、今から沖の村で飲んが！」だった。やがて売春禁止法で消え去る運命と聞かされていたこともあつて、一度は僕も行ってみたいと思っ

ていた矢先、即OKで出かけたのはいいが――。

ぼんやり残っている僕の記憶は、紅灯の巷などという色気などとは無縁の、セピア色に変色した古い一葉の侘しい写真のような光景だけだ。

何せ夜半過ぎに、酒を飲むためにだけ上りこんだ二十歳そこそこの男二人を相手に、二人の娼婦もどんな対応をしているのか戸迷ったのかもしれない。広めの和室にちやぶ台を挟んで、やたら世慣れた世間話で場を保とうとする友人を尻目に、僕はひたすら焼酎の徳利を傾けるだけ。ときおり少々くたびれかけた娼婦たちの顔を盗み視ては、終戦後、スカーフで顔を覆ってヤンキーたちの前に出現した女性群の中に、彼女もいたのだろうか？と考え、しばらくしては又、いや、その前に、鳴池航空隊から零戦^{ゼロ}で飛び立っていった特攻

兵たちは、出撃前夜には沖の村宿泊が許されたと聞くものだったが、彼女たちはどんな想いで死地に赴く若者たちとの夜を過ごしたのだろうか――などと考え出す始末。もちろん、そんな話題を口にするほど僕も無神経ではない。

夜明け前に沖の村を出るころには、折角の酔いも醒めきっていた。そしてその朝、床についてからも「彼女たちの生きてきた人生の厚みに較べれば、俺の人生のなんと薄っぺらなことか」などという、自虐的想いが追いかけてきて眠れなかった。

※ ラヴリーな時間



日本経済が急成長するにつれ、海外旅行が日常的になってからは、日本人の男性の買春ツアーなんていうのも有名になった。特に台

湾、韓国、桑港などに繰り出して行く団体旅行などだ。

もうその頃、僕自身がそんな性処理セックスなど必要としない状況になっていたこともあって、おおっぴらに語られるそのテの戦果などにはむしろ嫌悪感を持つようになっていた。自分が大切に心のどこかに仕舞っておいた領域が、土足で踏みにじられてゆくような、とでもいう心境だったのかもしれない。

カリフォルニアは、もうメキシコ国境に近いサンジェゴで開かれる流通問題の研修会に出かけた途中、サンフランシスコに立ち寄った夜だった。

夕食後、ホテル近くの映画館ではポルノ映画をやっていると聞いて、たまにはそのテの映画も見えておこうと出かけたことがある。映画の内容については一片の記憶も残っていないが、驚いたのは映画の終映後、映画館前の

通路に延々と並んでる娼婦の数の多さだった。

「私は50ドルでいいけどどう？」などと
いうあけすけな誘いを払い除けながら、列の終わりに近く、こちらを見やりながらも黙ったままの娼婦には、ついこちらから声を発していた。

「暇ひまそうだね？」に対して「とても閑ひまなの」と言い返してきた笑顔が若い。

「君を買うつもりはないが、閑なら酒ぐらいつき合うよ。俺のホテルはすぐそこだから」とすると以外にも、「うれしいな、でも友達も一緒にいい？」

で結局、その夜ぼくはホテルの最上階のバーから、カクテルなど片手に、シスコの夜景と娼婦たちの四方山話を楽しんだのだが、今でもサンフランシスコと聞いて真っ先に思い浮かぶのは、あの娼婦たちとのラヴリーな時間だ。

シスコだけではない。しかも娼婦だけでもない。ストリッパーもいれば芸者たちとの話らいもあつた。ハバロフスク、シドニー、熱海や修善寺、いわゆる紅灯の巷で遊んだ記憶の中でも、人生の快いアクセントとして残っているのは、むしろセックス抜きに触れ合いだけである。



※ センチメンタルジャーニー

旅とは日常から脱出した非日常の時間。人生を振り返ってみても、その時間帯はやはり際立つ色彩で記憶の中に刷り込まれているのだが、人生にはさらにその時間帯に飛び込んでくる思いもかけぬハプニングがあつて、さらに陰影を深めて行く。

もちろんそんなハプニングは、リッチで明るく楽しい記憶も悪くはないが、僕らの胸に

深く沁み込んでいるのはどちらかといえやはり、哀愁を帯びた場末感とでもいうような切なさを伴う記憶が多い。これはやはり「戦中派」といわれる世代感覚のようなものだろうか。

音痴の僕がカラオケに挑戦をはじめて数年が経つ。カラオケ店で選べる曲数はいまや十萬曲以上もあるというのに驚く。

そして日本人好みの演歌の七割以上は不倫の歌だと聞いたが、それはともかく、この世の歌の大半は男と女を歌つたものだろう。もちろん自分が歌う曲はそれなりに、自分の脳裡に浮かび上ってくる情景と重ね合わせていることが多いのだが、次々に覚えてたくなる歌にはまた魅力的な世界が垣間見えるのだ。「俺の人生まだまだ勉強不足」という思いに駆られる一因である。

ここで突然引っぱり出して申しわけない

が、渡辺淳一の「告白的恋愛論」を読んだ読者の一人、さる女性が「この作家は本・当・の・恋愛を一度もしたことがない人だ」と評していたのをふと思い出す。

オンナを描かせては超有名な売れっ子作家が書いた豊富な恋愛経験も、一人の女性読者から「一度も本・当・の・恋愛をしたことはない男」と簡単に切り捨てられる。それほど深淵な溝が男と女の間横たわっているということだろう。なにせ女性の違いは種の違いよりも大きいというのだ。片方から見れば命がけの熱烈な恋の経験も、いま一方から見ればほんのお遊びでしかないケースなどざら。だからこそ次から次に新しい歌が生まれ、新たな恋が語られるということにもなるのだろう。たしかテレビでだったと思うが、禅宗の偉いお坊さんなのだが、煙草好きと女好きという悪癖が生涯なおらなかったという逸話を聞

いた（見た？）記憶がある。煙草もだが、女好きは、檀家中の後家さんの家を洩れなく訪ね回っては口説くので、村中の評判になって困った。さすがに檀家代表も放っておけず注意しに参上するのだが、お坊さんは素直に「はい、はい、分かりましたよ」という返事だけはなさるのだが、女好きは一生続いたという話。

それでも高僧として尊敬された理由が何故かは僕にはよく分からなかったが、やはり男と女との間に横たわる神秘とでもいうような、何かを考えさせる話として僕の記憶に残っている。

ともあれ、この世が男と女という性の違いのない世界だったら、僕など片時も生きる気がしなかっただろう。異なる二つの性があればこそ歓喜もあれば、絶望にも突き落とされるという、この性の違いこそがこの世を動か

している原動力になっっていることは、まぎれもない事実なのだから。

※ 天の声 (続)

二人のうちどちらかが

ふざけているほうがいい

ずっこけているほうがいい

互いに非難することがあっても

非難できる資格が自分にあつたかどうか

あとで

疑わしくなるほうがいい

正しいことを言うときは

少しひかえめにするほうがいい

正しいことを言うときは

相手を傷つけやすいものだと

気付いているほうがいい

立派でありたいとか

正しくありたいとかいう

無理な緊張には

色目を使わず

ゆったり ゆたかに

光を浴びているほうがいい

健康で 風に吹かれながら

生きていることになつかしさに

ふと 胸が熱くなる

そんな日があつてもいい

そして

なぜ胸が熱くなるのか

黙っていても

二人にはわかるのであつてほしい

これが祝婚歌、冒頭に掲げた人行に続く残りの二十六行だ。

でもこの結婚を祝う長い詩の中に、「愛」という結婚式などにはつきものと言つてもいいぐらいの文字が、一つも出てこないのを、

不審に思う人もいるのではないだろうか？

天の声ともいわれるこのすばらしい詩に、
 ぼくのような門外漢が、無くもがなの落ちを
 つけるような気がしないでもないが、実はそ
 ういう心を縛りつけるような、窮屈な言葉が
 一字も登場しないのがまた、この詩の奥深さ
 だという気がするのだが、どうだろう。

さらにうがった見方をすれば、これは吉野
 弘が自分の姪の結婚式、つまり花嫁にプレゼ
 ントした詩である。そこで言外に「男に一穴
 主義の男なんていないのだから、一度や二度
 の浮気ぐらいで短気を起こしては駄目だよ」
 という想いまで込めて諭しているような詩、
 と詠めないこともないような・・・。

閑話休題、祝婚歌の墨書を僕に頼まれた桑
 木野さんのご主人はもちろんだが、祝婚歌の
 詩人吉野弘も、僕にとつての異星人、つまり
 一穴主義者ではなかったはず、と僕は思つて

いる。

そもそもオトコとオンナを創造し給うた
 造物主の狙いは唯ひとつ、人類の繁殖だけだ
 ったはず。夫婦というペアが円満に、なんて
 優生学的にいつてもマイナスにこそなれ、何
 の益もないことなど考慮されるはずがない。

いや、だからこそ男と女というペアの在り
 方について、人類はさまざまの試行錯誤をく
 り返してきたのだろうが、現代の風潮を一言
 でいえば「何でもあり」の無秩序時代。そし
 てこの祝婚歌は、そんな時代の到来を予知し
 ていたかのように、「愚かな悪あがきはやめた
 ほうがいいよ」とおだやかに諭している、僕
 にはそう聞こえてくるのだが――。

遅まきながらこの詩に出逢ったこともあ
 つて、今なお素敵な女性への憧憬は抱いても、
 老妻との間に波風の立つ心配はもうない。と
 きおりカラオケ店に出かけては、彼女の歌う

「黒の舟唄」などに耳を傾けるだけだ。

男と女の間には

ふかくて暗い河がある

誰も渡れぬ河なれど

エンヤコラ今夜も舟を出す

そうそう、渡れないことは分かっていても、
舟を出す気持ちだけは僕もまだ失っていない。

(エッセイスト)



『炉ばたセイ談』は、『炉ばたセイ談会』（入来武家屋敷茅葺門邸）が一年に一回（8月）発刊する機関誌です。『セイ談』のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの蒙を啓こうという程度の、堅苦しくない会という意味です。